

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒207-0005
東京都東大和市高木3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up, TOHOKU!

2014年(平成26年)6月16日 月曜日

無料

第25号

毎月発行

創刊2014年(平成26年)6月16日 月曜日

2040年、東北の半分以上の市町村が【消滅可能都市】に! (『日本創生会議』)

東北の人口激減を食い止めることは可能なのか? 従来発想の大転換なしに消滅回避は可能なのか?

全国市町村の半分以上が「消滅可能都市」に

まずは、国立社会保障・人口問題研究所がまとめた将来推計人口データをベースにして、最近の都市間人口移動状況を加味して2040年の20~39歳までの女性の数を試算。その結果、2010年と比較して上記年齢層の女性が半分以上に減少する自治体を「消滅可能都市」と名付けた。

日本の市町村は全国に1800あるが、実に49.8%に相当する896市町村が「消滅可能都市」となってしまった。加えて、その896市町村中、2040年に人口1万人を切るのが523市町村というまことにショッキングな内容である。

詳しい市町村別データが掲載されているので、ご自分に関係のある市町村をのぞいてみていただきたい。すさまじい近未来予測がそこにある。

東北の減少率は最悪

東北に限っていえば、状況はさらに深刻である。下に、各都道府県別の「20~39歳女性が半分以上になる自治体比率(2010~2040)」(日本創生会議HPより拝借)を掲載したが、東北のグラフは総じて高い。つまり、各地方ブロック別では、20~39歳女性が半分以上になる自治体が最も多いという

『日本創成会議・人口減少問題検討分科会』の『ショッキングな発表』
かつて、岩手県知事もつとめ、総務大臣も経験された増田寛也氏が座長である『日本創成会議・人口減少問題検討分科会』が先月初め、日本の近未来の人口減少予測を発表した。「全国1800市町村別・2040年人口推計結果」というタイトルである。

翌日、新聞各社がその内容を紹介したのでご存知の方も多いと思うが、とにかくその内容にみな仰天したはずである。

日本創成会議・人口減少問題検討分科会とは (日本創生会議HPより)

日本創成会議・人口減少問題検討分科会は、長期の動態を見据えた国のあり方、国家戦略を検討することを目的としております。国家戦略として「国のかたち」をどう再設計するか、人口減少社会を見据えた新しい国土開発(単なるインフラ整備とは異なる国づくり)のあり方、人口減少スピードをどのように抑えるか、従来の少子化対策にとどまらない総合的視点からの当面の政策あり方などを検討しております。

楽観論を排せ!

これまでは、国家全体の総論として、出生率が低迷を続け、抜本的な対策が必要であるとの指摘は何度も聞いた。しかし切迫感はなかったというのが正直なところではないか。それがこのデータでは、市町村別に2040年の予測を行って、しかも具体的な人数まで出てくる。

読者の方々で東北の市町村に何らかの関係がある方ならば、そのデータに直面すれば、あまりにもリアルすぎて、ショッキングで、居たたまれないであろう。もう楽観論は捨て去るべきである。2040年にこうしたデータ通りにならないためにはどうしたらいいのかを真剣に考え始め、かつ具体的な行動に移さなければならぬ。

① 「消滅可能都市」は、北海道や東北の山間部に集中している。都道府県別にみると、「消滅可能都市」割合が最も高いのは秋田県で96.0%。次いで87.5%の青森県、4位が81.8%の岩手県、5位に80.0%の山形県、東北4県が入り、東北勢が上位を占めている。(福島県は集計なし)

② 政令市・県庁所在地別の上位14には、57.4%の青森市が4位、54.3%の5位に秋田市がランクインしている。

③ 今後、この発表に慌てふためいた各自治体が日本全国で若年人口獲得運動を展開するであろう。人口が増えない状況下、

よそよりもわがまちの人口増加を図るためには、よそから人を引っ張って来なければならぬ。そうでなければ、海外からの移住促進しかない。あるいは、いままでの市町村も考えなかつたような人口増加策を打ち出すかである。

人口増加を実現するだけの切り替えができるだろうか。それとも、従来通りの対応で、大都市や他ブロックの市町村からの人口奪取戦術に敗れるのだろうか。しかも、3・11で人口が流出し続けている現実も無視できない。こうした状況下で東北に有効な打開策・妙策はあるだろうか。

前号でも新たな観光事業の可能性を検討した。しかし、つまり、東北の魅力は他地域に比べて抜きん出ているわけではない。余程の大改革なしには新産業足りえないという印象である。

こうしたことが東北に出来るだろうか。他に方法がなければやらねばならない。

東北新観光事業は救世主になれるか?

若年人口を増やすためには働き口が不可避である。東北独自の新産業として

東京圏の介護危機を全面サポートする新産業

実は、座長の増田氏も指摘するように、人口減少問題は衰退する地方だけの問題ではない。なんと東京圏が、急速な高齢化による介護ニーズに対応できないと

「ストップ少子化・地方元気戦略」(要約版)から抜粋

(日本創生会議HPより)

(参考)

人口減少の要因

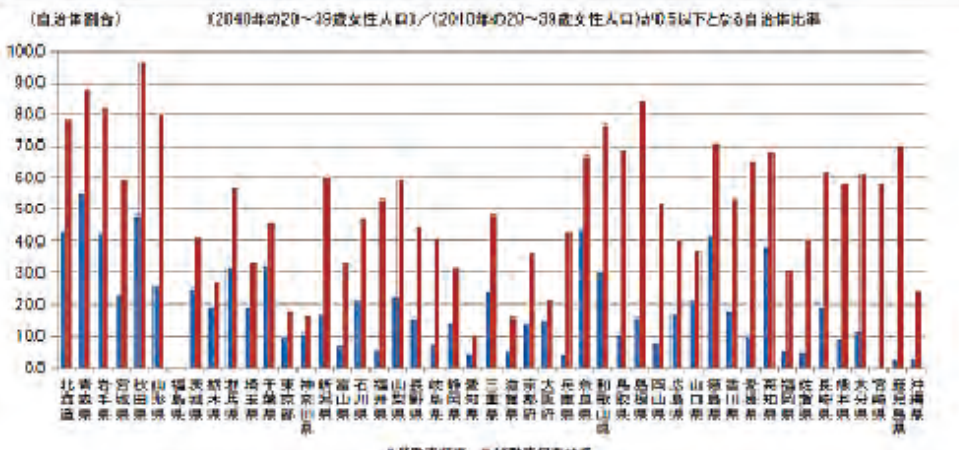
3. 地方からの人口流出がこのまま続くと、人口の「再生産力」を示す「若年女性(20~39歳)」が2040年までに50%以上減少する市町村が896(全体の49.8%)にのぼると推計される。これらの市町村は、いくら出生率が上がっても将来的には消滅するおそれが高い。一方で、大都市、特に東京圏は東京近郊を中心に高齢化が一挙に進むことが予想されている。

○今後も人口移動が収束しないとすると、若年女性が50%以上減少する市町村は急増。
※国立社会保障・人口問題研究所(社人研)の推計は、移動率が一定程度に収束することを前提としている。

20~39歳女性が半分以上になる自治体比率(2010~2040年)

○ 国立社会保障・人口問題研究所の推計を前提とした場合、20~39歳女性人口が2010年から2040年にかけて半分以上になる自治体比率は20.7%。

○ さらに人口移動が収束しないとすると、20~39歳女性人口が2010年から2040年にかけて半分以上になる自治体数は49.8%。



《備考》国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口(平成25年3月推計)」及びその関連データから作成

東北六魂祭 山形

5/24・25 開催

2日間で26万人

今年もすごい人出

仙台、盛岡、福島とつないできた東北六魂祭は、今年で4回目を数え、山形市で5月24日と25日の二日間開催された。二日間の人出は実に26万人。実行委員会の予想を3割も超えたすごい数である。



花笠音頭一パレード開始

新企画イベント

この山形開催での新企画イベントとして、メジャーロックバンドのGLAYがデビュー20周年目の5月25



GLAY Special Live

課題も浮き彫り

大盛況であった山形開催ではあったが、さまざまな課題も浮かび上がった。まずは、会場までのアクセス問題である。



すごい混雑の市役所トイレ

すし詰め状態だった。この大イベントにもかかわらず、車両数はわずか7車両、自由席車両は2車両という状態で、山形市が近づくにつれ、すし詰め状態がひどくなっていた。

さらに、開会式会場もすし詰め。これは例年のことだが、開会式会場を出て目指す進もうとしても、すれ違うのが大変であった。

なかでも、最悪はトイレ渋滞。事前にトイレ協力店舗を配置したということだが、なかには故障のため使用不能というところもあり、トイレ数が絶対的に不足し、市役所の臨時トイレなどは写真のように超すし詰め状態であった。

ついでに、筆者が楽しみにしていた『六魂Food Park』は、東北六魂の郷土料理と地ビールが売られるというところだったが、入場規制されていて入れなかった。特に、当新聞でも

シリーズとなった地ビールが飲めなかったのはとても残念だった。

東北の『食』を観光客にアピールする絶好の機会であったと思うが、まことに残念である。

参考までに、こうした混雑ぶりが他の観光都市と比べてどうなのかを少し考えてみたい。

まず、観光といえば京都だが、京都は平成20年の年間観光客数は五千万人を超えている。365日で割ると、一日あたり約十三万七千人。山形の六魂祭の一日あたり集客数より多い。それが年間を通じての話であり、毎日が六魂祭の状態である。しかし、この観光客数での大混雑は耳にしたことはない。

もうひとつ、最近来日観光客数の伸びが著しいと言われる福岡県を見ると、今年5月3、4日の二日間開

催された「博多どんたく」は二百万人を超えた模様である。一日あたりになると百万人である。こちらも観光客数での大混雑は聞いたことがない。

東北六魂祭の集客もまだまだである。一日十三万人の観客で大混雑しているのは観光産業による東北活性化、東北再興を唱えるのはおこがましい。

前号では、東北の観光産業の可能性について論じた。

外国からの来日客が地方に分散する傾向が顕著だが、東北にはまだ増加の兆しは見られないという。

そんななかでも、今後の努力次第では、東北再興のための主たる産業として、観光産業が有望であると指摘した。

しかし、実際のところ、道のりは遠そうだ。根本から考え直す必要がある。

リピーターを作るための観光資源はたくさんあるが、観光客をもてなすインフラが不足しているし、それに連動したPRも大いに不足している。

山形開催の東北六魂祭取材してそう感じた。

来年の開催は秋田市のようである。これまでの試行錯誤を何とか活かし、東北の観光産業に明るい可能性を示して欲しいものである。

観光客の集客比較

観光都市への課題



仙台すずめ踊り出陣前



盛岡さんさ踊り出陣前



ねぶた祭り



入場規制のフードパーク



わらじ祭り



秋田竿燈まつり

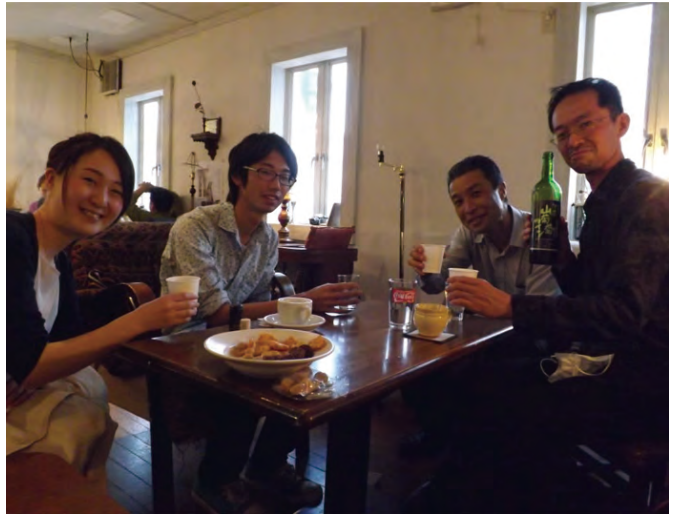
第三回 とにかく東北を語る会

5/25 開催、話題はまたあちこちに展開するも、「語る」だけでなく、さまざまな行動企画案の提案もあり

近々、南北朝時代の謎の遺跡―福島県伊達市の『霊山』登山計画持ち上がる

今回の参加者

今回の参加者は、常連メンバーである、大友氏、げんさん、それに筆者とシンガポールナイトのマスターの4名に加え、考古学専門の齋藤氏、平安文学研究の渡邊さんの6名だった。顔なじみの参加者数ばかりで、自己紹介に時間がかり、



ご参加いただいた面々

からなかつたせいで、いきなり濃い話に突入できた。話題はいつものごとく、あちこちに飛んだが、おかげで結構深堀できたのではないかと印象である。

山葡萄ワイン

前回、話題が縄文時代文化に及んだ際、縄文人の主食は何で、酒は飲んでいたら

のかという話になった。特に東北縄文人の主食は、栗クッキーだという。集落の近くには人工的な栗林があつたようだ。しかし、栗クッキーを毎日主食として食べる習慣にはみな納得していないようだ。酒も確かに飲んでいたら、原料は山葡萄か、あるいはニワトコという植物

山王遺跡発掘について

筆者は最近、東北の縄文遺跡発掘が中途半端のままになっていることが気になつていて、専門の齋藤氏に発掘のことを聞いてみた。すると、発掘には届出と資金拠出、発掘スタッフ、発掘成果発表、収集物の届出と管理問題などがあることを即座に教えていただいた。いつか独自に縄文遺跡を発掘してみたいものだ。万事に控えめな齋藤氏は

飲み会企画

会場のシンガポールナイトのマスターからの提案で、近いうちに「飲ミニュケーション」をしようということになった。みな真面目にコーヒーだけで話し合

『霊山』登山計画

前回と今回も話題に出た福島県伊達市にある「霊山」であるが、その後、有志で登山してみようという話が出ている。当初は、厳しい山道のた

三陸酒海鮮会

最近、参加者減少気味 協力者・参加者募る!

- ① 日本橋開催 5/15
- ② 渋谷開催 5/31

参加者減少傾向

最近、日本橋開催も、渋谷開催も、参加者が減少しつつある。特に渋谷開催などは前回、あまりにも参加者が少なく、開催できずに繰り延べ開催となつたほどである。

3・11から3年以上経過して、復興支援に熱心でなくなったせいなのか、類似の飲み会が増えて、この会のオリジナリティーが薄まったせいなのか、原因はよく分からない。

日本酒のラインアップも参加された方々からは好評だし、料理もおいしいと言っていたので、復興支援が冷めかかっていると、ともかく、今後、ぜひ多数のご参加をお願いしたいと思う次第である。

関上(ゆりあげ)が話題に

前回の日本橋開催は、それでも、14名ほどであった。



焼きホタテ (渋谷)



ご参加いただいた皆さん (渋谷)



ホタテ刺身



地酒ラインアップ (渋谷)

渋谷―石巻関係者中心

前回繰り延べとなつた渋谷開催であつたが、今回集まったのは、奇しくも宮城・石巻関係者、さらには筆者

援ではあるが、こうした意見交換ができることは、この会の趣旨に合致し、新聞発行とも連携するものであり、冥利に尽きる。

の母校の石巻高校同窓とその配偶者のみの6名の参加ということになった。当然、最大の被災者を出した石巻の今後の復興に話題は集中し、侃侃諤諤の議論となったことは言うまでもない。一次会で足りず、二次会に行き、今後も再会することを約束した。

「福島」はまるごと「危険」なのか

「美味しんぼ」騒動

非常に気が重い。この話題に触れることが、である。

触れれば恐らく「福島第一原発がある福島は危険だ」と主張する人からの反発を招くだろう。それでも、この話題については、私も言っておきたいことがある。それはやはり書いておくべきだろうと思った。

賛否両論が喧々嘖々噴出した、かの「美味しんぼ」の「福島の実験編」が及ぼした影響は大きい。低線量被曝による鼻血については、私はその科学的論拠を知らないが、それだけでなくあそこで論じられていることには、作者の思い込み、あるいは予断による決めつけが横行しており、それが私から見ると、福島といわれなき「危険の引き受け」につながっているように見える。あの事故から3年経った福島に沸き起こった「福島＝危険」の論陣、ここで

再考してみたいと思う。

横行する印象操作

作中の最も衝撃的な場面としてネット上でも繰り返し伝えられている、福島第一原発を見学に行った主人公が帰ってきて鼻血を出した場面。所詮はフィクションではないか、という見方もある。普通のマンガならそう割り切ることもできる。ただ、ここには実在の人物が登場する。前・双葉町長の井戸川克隆氏は作中で、主人公が突然鼻血を出したのを見て、「私が思うに、福島に鼻血が出たり、ひどい疲労感で苦しむ人が大勢いるのは、被ばくしたからですよ」と語る。

実に巧妙である。架空の人物の中で、実在の人物に語らせる。読み手は実在する人物の言うことは現実のことなのだろうと受け取りがちである。鼻血が出る人がいるのが事実として、それを被曝と

結びつける根拠がどこにあるのか。作中では、岐阜環境医学研究所所長の松井英介氏が、「放射線は直接粘膜や毛細血管の細胞・DNAを傷つけますが、同時に水の分子が切断されて細胞の中にできる、ラジカルによる間接作用が大きいのです」と述べているが、当の松井氏が「まだ医学界に異論はあります」と認めている通り、単なる仮説である。にも関わらず主人公に「そうか、それで鼻の粘膜の細胞が破れて鼻血が出るんだ」と納得させているのは明らかに印象操作である。

何が「真実」なのか

作者は自身のブログに、「私は自分が福島を2年かけて取材をして、しっかりとすくい取った真実をありのままに書くことがどうして批判されなければならないのか分からない」と書いている。しかし、逆に「2年取材してこれか」との感が正直否めない。結局自身の考えに基づく結論が先にある、その考えに合致する主張のみを取り入れ、そうでない主張は全く示されていない。取材期間が長ければその内容が真実に近づくと限らない、という好例とも言える。

作中に登場して「福島がもう取り返しつかないま

でに汚染された」、「福島を

広域に除染して人が住めるようにするなんて、できない」と発言している福島大学行政政策学類准教授の荒木田岳氏は、事前に自らの発言を作品で使わないよう求めたとのことだが、編集部が「作品は作者のもので登場人物のものではない」との理由で却下している。取材対象者の思いよりも作者の主張を通すことが優先されたわけである。

ちなみに、この「福島の実験編」、この部分だけが取り沙汰されているが、その前には主人公たちが東日本大震災の後に6回福島県取材に行ったことになっており、その中で福島県の食糧物の安全性についての取材も行っており、「安全が証明されている食べ物を食べない」ともつたという。その主張と後半のこの「福島は危険」という「真実」は、どうにも相容れない印象がある。後半の「福島は危険」の方が作者が言いたかったことであるとするならば、前半の「もつたいない」は単なるお体裁にしか過ぎないことになる。

「福島」とはどことだ?

作中では荒木田氏の発言のみならず、再三再四「福島は危険」と連呼される。先述の井戸川氏も作中で「今の福島に住んではいけない」と言いたい」と発言している。では、この「福島」とはいったいどことのことな

のか。まさか福島「市」のことではあるまい。となる

と、これは福島県全体のことを言っているとは解釈せざるを得ない。関東や近畿に居る人にはあまり実感できないかもしれないが、福島県を始め、東北各県は軒並み面積が広い。とりわけ福島県は、北海道、岩手県に次いで、全国第三位の面積を持つ大きな県である。まずこのことがよく理解されていないのではない。

確かに、福島県内には福島第一原発の周辺を始めとして、いまだ高線量の地域が存在するのは紛れもない事実である。しかし、例えばラーメンで有名な喜多方市などは福島第一原発から100km以上離れている。仙台市や山形の米沢市、さらには栃木の那須塩原市や茨城の日立市の方が福島第一原発に近いのである。それでも喜多方市は同じ福島県という、ただそれだけの理由でこれらの都市よりも「危険」なのだろうか。

そもそも、放射能が危険と言っているのなら、その問題を福島県の県境の内側に押し込めることに何の意味があるのだろうか。事故発生当時の放射性プルームの汚染ルートから見れば、福島県の西部や津軽地方よりも栃木や茨城、群馬、埼玉や東京の一部の方がはるかに危険ではないのだろうか。危険があるのを福島県内に限定してしまうことは、福島県

内で問題のない地域に「濡れ衣」を着せる一方、福島

県外で問題があるかもしれない地域のことを見えなくしてしまっている。

「そばもん」のアプローチ

ネット上にはこの「美味しんぼ」、「マンガ」として面白くない」という意見もあつた。なるほど、確かにこの視点も重要である。描かれていることが真実かどうかという議論ばかりが先行しているが、そもそもこれはマンガというジャンルの一つの作品である。その出来不出来を論じる視点があつてしかるべきである。

その視点で見ると、確かにこの問題になった「福島の実験編」、マンガとして登場人物がことごとく作者のスタンスに立っており、作中に異論、反論は現れない。登場人物が語るセリフはことごとく作者のスタンスを是とするものばかりである。ストーリーに振幅がなく、ただ単に作者の主張が登場人物の口から代わる代わるに述べられるだけである。一人の人物のモノローグでもよいのではないかと思われられるくらいである。

ちょうど同時期に「福島」を扱ったマンガがあつた。ビッグコミックに連載されている「そばもん」である。その名の通り、蕎麦をテーマにしたマンガで、この時期に福島の会津そばについて取り上げられている。

「そばもん」のアプローチは「美味しんぼ」とは対

極にある。「会津そば」山都編では、全国を放浪中の主人公のそば職人が、「震災後3年、会津のそばを訪ねる」という企画で取材するライターに同行、そこで会津の人々のこれまでの苦労とそばづくりに対する熱意と努力が明らかにされる。ただ、それだけでなく、このライターが「福島産のものには食べない」という読者もいる」と主張して、福島産の安全性について丁々発止の議論となつている。

こうした展開であれば、賛否双方の主張が明確になつた上で話が進んでいくのだから、論点が自ずと整理される。ストーリーとしても面白い。しかも、よく分からない根拠によって「被曝した」とか「住めない」とか主張することもなく、あくまでそれに関するデータを明らかにした上で考察が進められている。片や登場人物全員が語りだけで不安を煽る展開、片やデータに基づいて賛成反対双方の議論が進む展開、どちらに説得力があるかは言うまでもない。

この「会津そば」山都編の前編は異例なことに、期間限定ではあつたが全文がネット上で公開された。この問題に対する作者の並々ならぬ意思が窺える。

問われている私たち

「美味しんぼ」では作中

で主人公の父親が、「福島

に住んでいる人たちの心を傷つけるから、住むことの危険性については、言葉を控えるのが良識とされている。だが、それは偽善だろう」と述べている。まず、そのような「良識」はない。リスクについての情報があればそれは隠さずに公開されることを福島の人たちも求めているはずである。ただし、それはそのことがそれこそ「真実」であつた場合、という大前提がつく。今回のような被曝の影響とは立証されていない鼻血を出したか被曝したために出たものと印象づけようとして、広大な福島全土が住むのが危険な地域であるかのような言説を振り回したりというのはまったくそれには当たらない。もつと言

えば、どちらが「偽善」かと言えば、自身の頭の中にある「真実」のみに固執し、それに反対する指摘には耳を傾けず、徒に人心の不安を煽る方が「偽善」と言えるのではないだろうか。福島第一原発事故が未曾有の惨事であることは言うまでもない。その影響が今後数十年、あるいは数百年に亘って残り続けることも疑い得ない事実である。また、放射性物質、特にそれが人体にもたらす影響については分かっていること、多い。そこで、多様な意見が出ることは本来望ましいことである。今回の作者の主張もその文脈では多様

な意見の一つとして尊重されてしかるべきである。ただ、今回どうしても看過できないと思つたのは、本来そうした多様な意見の一つでしかないはずの「福島は全部危険」という意見をあつたか「真実」であるのかのように伝えたという、その伝え方の姿勢である。

と同時に、今回のことは福島、そして東北に住む私たちが試された機会でもあつたと思う。数十年、数百年のスパンで考えなければいけない今回のこの福島第一原発事故に関しては、これからの時折思い出したように今回のような言説が何らかの形で飛び交うことになるに違いない。その時に今回のようにただ単に風評被害の発生を心配するだけではなく、全く根拠の伴わない言説に対してしっかりと根拠を挙げて反論し、論破していく必要があるというのである。今回の作中でも、福島の人たちの「人の良さ、我慢強さ」が言われているが、謂れのない非難や中傷を受けた時には、そうした美質を擲つて的確にこちらの意見を表明していくことが求められている、と私は思った。今回のことは、今後折に触れて続くであろう「汚染された東北」にまつわる言説としてそれは「蝦夷」と呼ばれた古の東北の人たちが辿つた道でもあるが、これに対する私たちの心構えを問うものだったと考えたい。

「美味しんぼ」では作中

「美味しんぼ」では作中

「美味しんぼ」では作中

「美味しんぼ」では作中

連載
むかしばなし

芭蕉のむかしばなし

第十三話
雷神・悪源太



奥羽越後氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出演し演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当。

「ト、トヨ・・さん・・なにか？」
泰衡が少女に向かってそう呼びかけたので、長里らのみならず驚いた。トヨと

歳の頃は十二、三歳か。小柄な身体に不釣り合いな男物の狩衣とも思われる装いを、少女は纏っていた。衣の色は鮮やかで、女の意匠で着こなしている風にも取れる。しかし、かなりだぶだぶであるし、長い髪は振り乱したままである。彼女は泰衡や祝魚ら十数人の男たちの出現に、明らかに怯えているようだった。

は、かなり高齢の、老婆だと言っていたではないか。しかし、少女は反応した。そして、慄きながら何か言葉が発したのだ。ところが、全く意味不明である。

「もしかして・・発作があったか。不覚。何たる不覚。」
泰衡もまた、よくわからない事を言う。
「な、何だよ。このおぼ子・・婆さまの孫か何か？」
祝魚は泰衡と少女を交互に見やり、戸惑い、質す。近づこうとすると、少女はさっと後ずさりして懐剣を閃かす。そしてまた、意味のわからない怒声を発するのだった。

「ならぬ。控えよ。皆の者頭が高い、ひれ伏せ。」
何を思ったか、泰衡が真っ先に膝を折り、少女に向かって地面に手をつき、頭を深く下げた。祝魚、長里以上に、泰衡の家臣どもが仰天する。
「ど、どういう事ですか、御館様。」
長里の問いに、伏したまま泰衡が答える。
「このお方は他ならぬトヨさんである。亡くなられ、いま甦えられたのだ。」
気がつく、泰衡の家臣たちが主君に従い即座に一

同、地に伏している。「い、意味がわからねえよ。どういう事なんだよ。」
祝魚、動転するばかりである。
「ともかく、この娘を怯えさせてはならねえ。今、この娘は言葉もわからん。この国の記憶も何もねえのだ。」
仕方なく、祝魚と長里も、膝を折り、両手を地に着く。しばし動く者もなかったが、やがて敵意がないと悟ったのか、少女が剣を収めた。

泰衡が顔を上げ、ゆつくりと左腕を掲げて少女に庵の場所を指し示す。
少女はまだ怪訝な視線で男たちを見下ろしながら、示された小屋を認めて歩を進めた。黒髪の間から覗く白い顔は、彫りが深く、西洋人のように見える。
「お祖父様の、言うた通りだ・・。」
少女の行く手を見送りながら、泰衡が呟く。
*
奇しくも、同じ女の名が、そこから半里も離れていない広瀬川の河原でも、怪僧の口から発せられていた。「誰なのですか・・。その、トヨという女性は。」

今純三が、訊く。ところが、芭蕉より先に、盲目のヤエトが口を開いた。「トヨならば、向こうの崖の上にいるぞ。」
不意を突かれ、一同呆氣にとられる。向こうの崖と云ってヤエトが指したのは、東の川下の方角。川が右に大きく蛇行した先で、ここから崖は見えないが、盲目でもヤエトは川の音などから方角がわかるようだ。
「やはり、おられたか。」
芭蕉はしかし、それほど驚きもせず言った。
「きよ・・共通の、お知り合い、な訳ですか。」
「トヨは、私ら仲間と共に、えみしとして戦った、戦友であったのだ。」
ヤエトの言葉を、芭蕉は素直に受ける。
「そうであったか・・拙僧が初めてトヨ殿に会ったのは、宮澤殿もやってこられた、仙臺建設の時代であった。」

「ええっ！、意味がわかりません、蝦夷の戦い、仙臺建設・・まるで何百年も生きていような話ではありませんか。」
「そうなのだ・・何百年、では効かぬかも知れんな」
俄かには信じられぬ話を、さらりと云うのだが、充分信じられぬものを見てきた一同にはもはやそれほど抵抗がなかったかも知れない。
「拙僧がトヨ殿に会うのは二度目だが、トヨ殿にとつ

て拙僧は初対面のはず。」
「それはどういう事です。」
「拙僧はある事情から何度も時空間を跳躍する年月を送ってきた。そして仙臺建設の時代へやってきた時、トヨ殿が突如拙僧の前に現れたのだ。『ここに貴殿が出現される事を存じていた』と申されてな。」
「予知していた・・？」
「否。つまり今、拙僧どもがおるこの時代に、拙僧に会った事を憶えていた。正確には、日記に書かれていた。拙僧が今から会いに行つて、話すだろう。」
目を白黒させる一同。しかし佐々木喜善と宮澤賢治は、全て飲み込むようにじつと耳を傾けている。
「拙僧が会ったトヨ殿は、壮年期であられた。だが、こう云われたのだ。次に会う四百年前には、自分は甦つたばかりの十三歳で、何もわからない状態であるから宜しく頼む、と。」
「甦つたばかりの・・十三歳？」
「トヨ殿は亡くなられると、十三歳の身体・精神を以つて復活される。」
喜善と賢治も、さすがに面喰らって見える。
「復活とはいえ、記憶も何も白紙に戻るのだ。いまのトヨには私らと共に過ごした記憶はない。あれで甦つたと言えるのかどうか、疑問だが。」
寂しさとも苛立ちとも取れる感情を含み、ヤエトが

言う。
「この地の住民は、皆この対岸、あの黒い霧の中だ。トヨめが手引きし、大天狗に民を売り渡しおった。」
トヨという女への憎しみさえ込められているように、聞こえる。
「売り渡した・・？」
「トヨは権力欲の強き女だ。我が支配していた人民を一夜にして奪い、大天狗への献上品としおった。」
「人々は・・どうなったのですか。」
「あの霧の向こうには魔王の国があつてな。民は奴隷にされたとも、台衣の肥料にされたともいう。」
「台衣とは何ですか。」
「天界の穀物で、寒さや瘦せた土にもびくともせず、豊かな収穫を保つとか。」
「それは本当ですか！ 飢饉知らずとは」
宮澤賢治が目の色を変えて身を乗り出した。
「トヨ殿がそんな事に加担されるはずはない。戦の前に人々を避難させたのだから。」
「そういう芭蕉に、ヤエトは冷徹な一言を浴びせる。
「大天狗が英雄か菩薩か何かのように考えているのか。あらゆる鬼、妖怪が恐れをなす程の、魔物の中の魔物ぞ。」
喜善が静かに口を挟む。
「あの対岸、つまり青葉山は、戦国期には伊達氏が、いやその前に国分氏が元々の城を作ったと聞いております・・という事は、この

後、大天狗は駆逐できるという事なのでは。」
芭蕉がそれに応えて言う。
「トヨ殿は、詳しくは語らなかつた。ただ、我が出会うという事のみ。」
「大天狗だろうが何だろうが、青葉山から立ち去つてもらわねば・・仙臺の町が作るに作れますまい。」
大寺がそう言い、自作らしい木製のカップの中味を飲み干す。
「ば、芭蕉さん、行かれるのでしたら・・やはり私も同行させていただきます。」
突然、宮澤賢治が拳手し、そのまま立ち上がりつて進言した。
「飢饉知らずの、天界の穀物・・もしそれがかの対岸に存在するのなら、私は是が非でも手に入れたいです。」
*
今日こそ、越える。
清和源氏の嫡流にして、坂東武者もそうでない者も有象無象かき集めた数十万もの軍勢を統べる右兵衛権佐・頼朝は周囲を守る家臣どもと同じく、馬を降りて山越えに挑んでいた。
前方の行く手に茂る森の連なりからは絶え間なく無数の兵どもの叫びが上がり、重なり、木霊しうねっている。

「この真昼間から、魔物か。」
「何者か、術師がいるものか？」
「やはり奥州、何が出るかわからんな。魔は魔を以つて制するが肝要か・・あくまで、我が心の支えとしてご同行頂いたのだが。」
頼朝が、周囲を守っていた家臣団の中から、山伏姿の武者を呼び出すと、何か耳打ちするように言葉をかけた。
修羅場を覆う秋晴れの空に、突如雷鳴が轟いた。一瞬、戦の狂気も吹っ飛んだ兵らの目に、全身から火を

噴いて落ちていく大鳥の姿が映る。
阿津賀志の頂から、国衡も目を凝らしている。
「我が矢、討たれました。」
傍らで、大河太郎がうろたえもせず言った。つまり大河の矢の化身である鳥が、焼き殺されたのだ。
「今の稲妻にか。一体・・。」
頼朝、どうやら雷神を味方につけておるようだな。これは厄介也。」
雷神だと・・源氏ゆかりの八幡神に關係するののか。」
「羽黒修験間の、過去の情報から推理すると、おそらく頼朝の腹違いの兄、鎌倉悪源太・義平ではないかと。斬首される直前、太刀取りに対して雷になつて崇ると予言し、実際に太刀取りはその後落雷に遭つて命を落としたといひます。」
国衡、ニヤリと笑つた。
「愉快な話だな・勝てるか、大河太郎。」
大河の眉が複雑に歪む。
「我が任務は、西木戸様を逃れさせる事也。」
「くだらぬ。棟梁は一人生き延びれば充分。魔人の相手は魔人が務めよ。」
「そう言い放つと、国衡は身を翻して陣の撤退を始めたのだった。」

次回予告――
少女が二人登場してしまつたが、一体どちらが主人公なのか！？そもそも男たちは脇役なのか！

「誰なのですか・・。その、トヨという女性は。」

「芭蕉は初対面のはず。」

「トヨは権力欲の強き女だ。」

「我が矢、討たれました。」

「我が任務は、西木戸様を逃れさせる事也。」

「我が任務は、西木戸様を逃れさせる事也。」

「我が任務は、西木戸様を逃れさせる事也。」

「我が任務は、西木戸様を逃れさせる事也。」

「我が任務は、西木戸様を逃れさせる事也。」

シリーズ 遠野の自然

「遠野の春」③

遠野 1000 景より



SL銀河 青笹 上郷間

遠野の春シリーズはもう少し続けようと思う。とにかく、今、さまざまな花々が一斉に開花しているのがある。

珍しい花もある。初めて聞く名前の花もある。たった2回だけではとても紹介しきれないし、それだけで終わるのは何とももったいない気がする。もっともっとと遠野の春を堪能していただきたいと思う。

また最近、いつも写真をお借りしている「遠野1000景」さんが多くの写真を撮られている「SL銀河」もい。

「SL銀河」とは、SLの「C58 239」を復元し運行する列車であるが、釜石線・花巻線・釜石線を牽引している。

釜石線沿線を舞台に描かれた宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」を代表的なテーマとして列車全体をプロデュースし、宮沢賢治の世界観や空気感、生きた時代を共有する事で東北の「文化・自然・風景」を感じられる車内空間となっているようだ。

この列車のエクテリア・インテリアデザインを手掛けておられるのが、あのボルシェのデザイナーとして有名な山形出身の奥山清行氏ということも最近知った。いつか乗ってみたいものだ。

◇

最初の写真は、菜の花畑のなかを疾走する「SL銀河」である。「SL銀河」と菜の花の黄色のコントラストが何ともいいえない。すばらしい写真なので、いつもより大きなスペースを割いた。「SL銀河」はもう一枚。煙をモクモクと出しながら走っている写真。かつてはいろいろなところで見られた光景だが、いまはこうしたイベント

列車だけとなってしまった。

◇

オダマキの鮮やかなムラサキがいい。早池峰神楽には「おだまき」という演目があるそうだ。夜になると、娘のところに男が通ってくる。けれども、昼、その男の姿を見た人はいない。両親が娘に男の衣服におだまきの糸をつけさせると、その先が三輪山の大きな池に消えていた。相手は蛇の化身であったという話で、能にも、謡曲にもなっているという。

クマガイソウ。初めて聞く名前である。ラン科アツモリソウ属に属する植物という。花の形状もまためずらしい。

ハシバミの花。ブナ目カバノキ科ハシバミ属に分類される被子植物の一種という。花の概念を越えている。ハナカイドウ。鮮やかな色。可憐でいて、光り輝いている。

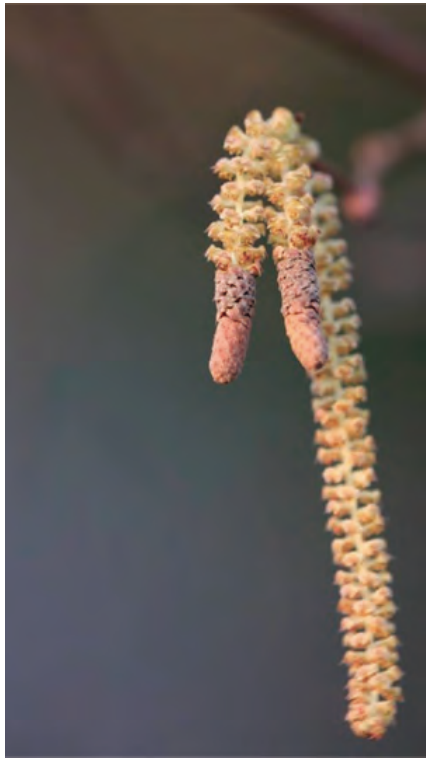
シャガ。アヤメ科アヤメ属の多年草。色といい、形状といい、まことにおしゃれな花である。

八重咲きエンレイソウ。八重咲き延齢草と書く。ユリ科エンレイソウ属の多年草。筆者は初めて見るが、なんとも豪華な花で、高貴な印象である。

サザンカ。さまざまな歌に登場するが、花を見たことはあまりなかったような気がする。こんな花だったのだと納得した。



ハナカイドウ



ハシバミの花



クマガイソウ



オダマキ



SL銀河 足ヶ瀬 上有住間



サザンカ



八重咲きエンレイソウ



シャガと稲荷社

愛知県豊田市 増福寺

(13ヶ寺目、別名：風鈴寺 風鈴祭りで有名)

人災だとしても「自然災害」でごまかそうとする電力会社

桃源郷のような風情の豊田市・三河地方にある寺、ここには原発はないがダムがあり、2000年9月、ダムからの放流失敗で大災害に見舞われた経験を住職が語る

MONKフォーラム代表 長谷川稔氏寄稿

笑い仏さん

福島への行脚

第十四回



咲きほこる『しだれ桃』一まさに桃源郷

福島を目指す「笑い仏」は六月現在、愛知県の増福寺に逗留しています。これで十三か寺となります。皆さんからのメッセージを頂いた芳名帳も三冊を超えました。これからもご支援のほど、よろしくお願いいたします。

土地にあり、豊田市中心部から車で向かえば、道中は矢作川の穏やかな流れを楽しむことができます。四月に訪れた際には、しだれ桃が満開でした。ピンク、白の花が美しく咲き乱れていました。それが散策路ぞいに、びっしりと咲いている。桃源郷にひよっこり迷い込んだような気分です。四季の変化を楽しめる土地だと感じました。もとは、農家の方が細々と育て

ていたようですが、「こんなに美しいのなら、町を挙げてやろう!」という声が高まり、これほどまでに素晴らしい花の回廊ができあがったとのこと。こう書くと、のどかな田舎町の風情に見えますが、それだけではない一面もあります。佐藤住職と東日本大震災の話をしたときのことです。

「確かに、この辺りに原発はないけど、すぐ近くにダムがあるんですよ。」お寺を少し下ると、すぐに矢作川が見えます。三河を蛇行するこの川の下流は豊田市中心地となり、そこにはトヨタ自動車やアイシン精機など、名だたる大手メーカーが密集しています。矢作川は、これらメーカーに工業用水を供給していました。そして、必要のために多目的ダムが建設されたのです。

「ところが、集中豪雨のときに町に水が流れ込み、大変な被害を受けたのです。」平成二二(二〇〇〇)年九月十一日のことでした。東海豪雨が山間部を襲ったこの日、記録的な雨量はたちまちダムの許容量を超えます。そのため、非常用ゲートを開けて水を放流したのです。

「でもね、後でこのゲートを開けるタイミングを巡り、電力会社と町で色々あったんですよ。」この豪雨により、小学校の低層階が水没するなど甚大な被害が発生。当然、ダムは治水のために作られたもの。『もともと早く放流すれば、町への被害は少なかつたのでは?』という声が出るのは自然な成り行きです。今となっては、このタイミングの是非は分かりません。ただ、電力会社が非常用ゲートを開けるといふ状況を常日頃から想定していたかどうかは疑わしい。彼らは「自然災害」であった点を強調し、その補償は

十分ではないと言います。どこかで聞いた話です。そう、東日本大震災における東電の対応です。こうした体験を経ると、『原発がないから大丈夫』という感性が、実に甘い考えであるということが分かってきます。無論、ダムが治水に役立つという事実は否定しません。ただ、原発同様に、それが持つ功罪は管理者によつてきちんと住民に説明されるべきでしょう。

原発と同じで、ダムも年月が経つとほころびが出てきます。東海大地震などの大災害が起これば、当然、東海豪雨の比でない甚大な損害と悲劇が発生するでしょう。計らずも、福島の現実を身近に感じた瞬間でした。

◆ 増福寺では、境内に願い事を書いた風鈴を飾る『風鈴祭り』を七月一二日に行います。町のそこかしこに風鈴が飾られ、八月末まで音色を楽しむことができるそうです。さまざまな願いを風鈴に託したいと思えます。

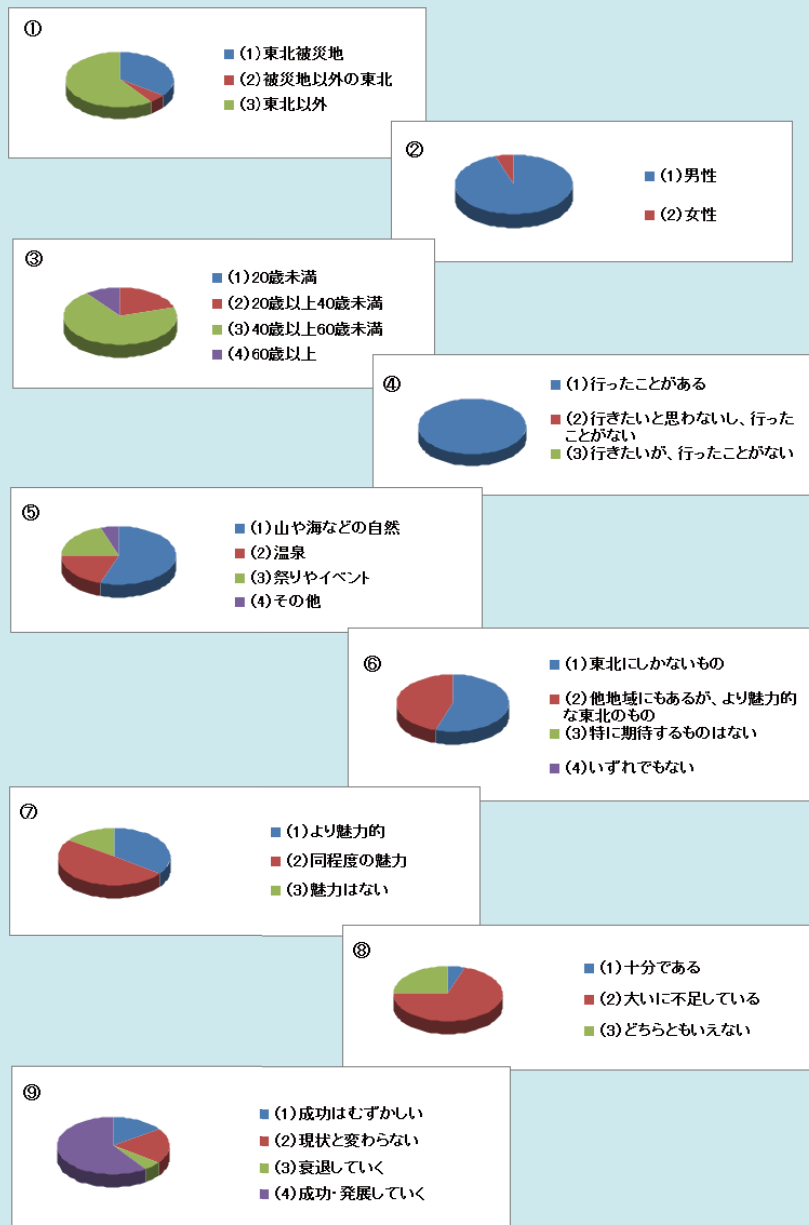


『風鈴祭り』一願い事を書いた風鈴を飾る

● 増福寺
愛知県豊田市小渡町寺ノ下18-19
☎ 0565(68)2615
アクセス JR豊田市駅から「とよたおいでんバス」小渡行で約1時間、600円
☎ 名鉄バス 137710565(32)

第24号 ネットアンケート集計結果 これからの東北観光事業の展望

No.	質問と選択肢	回答数
①	住所	
(1)	東北被災地	7
(2)	被災地以外の東北	1
(3)	東北以外	12
②	性別	
(1)	男性	19
(2)	女性	1
③	年齢	
(1)	20歳未満	0
(2)	20歳以上40歳未満	4
(3)	40歳以上60歳未満	14
(4)	60歳以上	2
④	東北観光に行ったことがあるか?	
(1)	行ったことがある	20
(2)	行きたいと思わないし、行ったことがない	0
(3)	行きたいが、行ったことがない	0
⑤	東北観光で行きたいところはどこか?	
(1)	山や海などの自然	11
(2)	温泉	4
(3)	祭りやイベント	4
(4)	その他	1
⑥	東北観光で期待するもの	
(1)	東北にしかないもの	11
(2)	他地域にもあるが、より魅力的な東北のもの	9
(3)	特に期待するものはない	0
(4)	いずれでもない	0
⑦	他の観光地と比べるとどうか?	
(1)	より魅力的	7
(2)	同程度の魅力	10
(3)	魅力はない	3
⑧	東北観光PRは十分か?	
(1)	十分である	1
(2)	大いに不足している	14
(3)	どちらともいえない	5
⑨	東北観光は事業として成功するか?	
(1)	成功はむずかしい	3
(2)	現状と変わらない	4
(3)	衰退していく	1
(4)	成功・発展していく	12



今回は「これからの東北観光事業の展望」でした。衰退を続ける東北経済の救世主になれるかどうか興味がありましたし、この産業は巨額な設備投資がいる訳でもなく、東北には魅力的な観光資源が多いし、比較的立上げも早いし、何より最近の訪日客増加の波に乗り東北に海外からたくさん観光客を呼べれば、効果絶大です。そんなことで、ぜひ聞いてみたかったテーマでした。回答者数は20名。「東北観光に行ったことがあるか？」は全員が「行ったことがある」でした。「東北観光で行きたいところはどこか？」は「山や海などの自然」が55%、「温泉」と「祭りやイベント」が同数でそれぞれ20%。「東北観光で期待するもの」は、「東北にしかないもの」が55%、「他地域にもあるが、より魅力的な東北のもの」が45%。「他の観光地と比べるとどうか？」は「同程度の魅力」が50%、「より魅力的」が35%、「魅力はない」という回答も15%ありました。「東北観光PRは十分か？」は「大いに不足している」が70%と圧倒的。「東北観光は事業として成功するか？」は「成功・発展していく」が60%、「現状と変わらない」が20%、「成功はむずかしい」が15%という微妙な結果でした。

今年の天候は振れ幅がはなはだし大きく、変化が大きすぎて、明治初期に始まり、百年以上の歴史を持つ観測史上初という気象現象も頻発している。なおかつ、四季が規則正しく順繰りに巡ってくるという通常の季節感が崩れてしまった感じがする。そのため、心身ともに落ち着かない人も多いのではないだろうか。まず年明けに、各地で観測史上初とか数十年ぶりという大雪があった。5月には夏を先取りしたような数年ぶりという30度を超える「猛暑」が到来した。最近はいえ、確かに梅雨入り宣言はしたが、梅雨の限度をはるかに通り越してのあちこちの大雨、ゲリラ豪雨続きである。まさに自然災害ラッシュの一年の前半である。大昔ならば、これらの自然災害で年号が変わってもおかしくないほどである。そこであらためて思うのは、日本は古来より自然災害の多い国ということだ。もしそうした伝統がなければ、とくに国全体がパニックに陥っているだろう。選歴を過ぎた筆者には、雪かきによる腰痛と肩こりが完治しない状態に加え、天候激変に伴う体調不良が続いているが、大自然の驚異も痛いほど実感している毎日である。

編集後記

今年のはじめ、明治初期に始まり、百年以上の歴史を持つ観測史上初という気象現象も頻発している。

「東北を世界に！」プロジェクト募集

プロジェクト募集要領

- ① 東北の復興、活性化、再興を目的としたプロジェクト企画であれば、何でも可
- ② 応募資格は特に定めず、被災地、被災地以外の居住も問わず、国籍・年齢・性別を問わず
- ③ 企画書のようなものがあれば可---形式自由(プロジェクト名、プロジェクト期間、目的、どうやって実現するかの手段、仲間などを明記していただきたいと思ひます)
- ④ ✕切はとくに設けません

「東北を世界に！」プロジェクト募集

連絡先/企画提出先

(郵送) 〒207-0005
東京都東大和市高木3-315-1
ホームタウン宮前2-2
電子タブロイド新聞【東北復興】宛
(メール) yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

- ・ ご提案いただいた企画については、当新聞で責任をもって検討させていただいた上で、企画開始に向けてのしかるべき方法・手段をご提案するなり、企画実現のための仲間を募ってまいりたいと考えております。また、当新聞でご紹介させていただきたいと思ひます。(氏名公表か非公表かはご相談)

・ たくさんのご提案をお待ちしています